

生活体験の実態から見た保育の内容 および保育者養成の課題についての考察

進 藤 容 子
(湊川短期大学)

緒 言；

保育は、子どもの生活の中での展開が基本である。一方、最近、保育・教育の現場で、子どもたちの生活体験の偏り（不足）をよく耳にする。ここでいう「生活（体験）の偏り」とは何を指すのであろうか。また、その「生活（体験）の偏り」が保育の展開の中でどのような影響をもたらしているのだろうか。さらに、このような「偏り」は保育者養成施設における学生にも見られ、学生自身の生活体験を考慮した上での養成も課題となってきたようである。

保育現場で経験的に危惧されている問題を、生活実態に関する各種調査から明らかにした上で、保育内容、養成課程での取り組み方を検討する必要性を痛感し、本研究を想起した。

研究目的；

子どもの生活実態を各種調査から検討し、子どもの生活傾向を明らかにするとともに、保育においてのどのような問題性を生じるのかの考察を行う。

さらに、これらの問題を受け、養成課程にある学生に対し、必要とされるアプローチについて提案することを目的とする。

子どもの生活から見た保育の内容の課題

方 法；

各機関で行われた調査結果を集約し、そこから子どもたちの生活実態の特徴について考察を試みた。

結果と考察；

各調査より示唆される「生活体験の偏り」は、以下の範疇に整理されると考えられた。

- ① 個人的な活動への偏り
- ② 受動的な活動への偏り
- ③ 室内での活動への偏り
- ④ 家事の不参加
- ⑤ 生活リズムの乱れ

原因としては、保護者や社会の価値観の変化、屋外

での活動の場の減少とそれに伴う社会の広がりへの限定、生産・消費の分離と家事労働の減少、社会全体の生活リズムの多様化（＝乱れ）にあると思われる。保護者は、子どもに屋外で人とのかかわりをもちながら豊かな活動をさせたいと考えてはいるものの、そのような人的、物的環境に乏しい状況の中で実現できない悩みを持っている。

これらの偏りが、子どもの育ちに、体力の低下（気力の低下）をもたらし、生活習慣病の原因ともなり、生活を基本とする保育の実現にも困難な問題となっているのではないだろうか。

保育活動と子どもの生活とに連続性がなく、隔たりが大きい場合、子どもにとって、保育活動はイベント性をもち、リアリティを欠いたものになり、保育者のねらいは達成されないかもしれない。さらに、子ども各個人によって、「生活体験の偏り」が異なる点も困難さを増している。「生活の偏り」の問題を「体験の補填」という発想だけで行うのは、集団として行う保育という側面からも不十分である。

園の生活から保育のねらいを達成しようとするとき、子どもの生活全体との連続性が重要であるが、子どもの生活の偏りが個人によって異なり、連続性をどのように見出せばよいのか、「体験の補填」では解決しないこの問題をどのように考えればよいのか、という課題が提示されているように考える。

まとめ；

子どもの生活体験には偏りが見られ、また個人差が大きい。保育現場で前提としている子どもの生活からの隔たりにより、子どもは園での活動にリアリティを感じることができず、子どもに豊かな体験をさせようとする試みもねらいを十分に達成することができない。保育を展開する中で、この問題に対し、園での活動に生活のリアリティを感じることができるような活動が求められると考える。

ここで、「食と環境」をテーマに食材の生産から廃棄、さらに物質の循環と、全体を体験できるような取

り組みを課題として考えていきたいと思う。全体を体験していくことで、活動がイベントではなく子どもの生活そのものとして実感できるものとなる。また、「食」は生命を維持する基本であり、生活リズムのベースとなる。他の生物との関わりが理解しやすく、生態系についての感覚を養うことが期待できる。したがって、「食」生活にリアリティが伴ったとき、子ども自身の生命に重みを感じ、自分を取り巻く環境への連続性を実感できるものと予測する。

保育者養成課程での課題

前述の結果からも、保育者養成課程にある学生には「生活体験の偏り」の経験者が少なからずいることが考えられる。そのような学生にとって、保育のねらいと内容が前提としている、また実現したいとしている「生活」とはどういうものかを考えていくこと、実行することは難しい。そこで、保育者養成においても、生活にリアリティが感じられるような取り組みが必要であると考えられる。ここでも「食と環境」をテーマに食材の生産から廃棄、さらに物質の循環と、全体を体験できるような取り組みを考えたい。中でも「土」の機能を意識できれば、食物連鎖だけでなくより全体的な生態系認識を深めことができると考え、「土」の機能に気づいていく実体験的な教材の試作を行った。

方法；

平石の報告^{1,2)}を参考に、生ゴミ処理容器を作成し、生ゴミを投入した。

容器には材料は市販の植木鉢を使用した。この容器の底に、ポリエチレンメッシュを敷き、軽石 1kg、赤玉土 1kg、園芸土 3.5kg を重ねて入れた(図1)。容器には小動物侵入防止のためステンレスふりをかぶせ、プランターラック(26cm 高)に乗せて用いた。処理容器の全重量は 6.0kg であった。

原文では、毎日生ゴミを投入し混合攪拌を行うが、授業での取り組みを想定して2週間ごとの投入を試みた。

時期：2000年10月～2001年1月

場所：構内野外の雨が降りかからない軒下。1日数時間日光に当たる場所に放置。

生ゴミ：生ゴミ 200g/回。

生ゴミは 1cm 角程度に裁断し、水分の多いものは台所用生ゴミ水きり袋にいれ、手で搾って用いた。

投入方法：まず、容器の表層土を移植ゴテで2～3杯分、別にとっておく。中の園芸土の部分移植ゴテで

よくかき混ぜた後、中央に穴を掘りその中に生ゴミを入れる。移植ゴテの先でゴミをすきこみながら細かく砕き、土とよく混合する。最後に先にとりわけた表層土をかぶせる。投入総重量は 1.0kg であった。

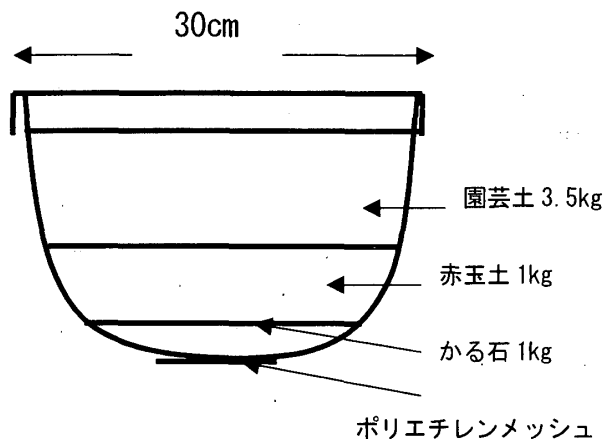


図1 簡易生ゴミ処理容器概略図

結果と考察；

今回投入した生ゴミは、野菜・果物の廃棄物が多く、動物性のものは少なかった。投入後の処理容器全重量は、投入前と同じ 6.0kg であった。処理中の土は乾いた状態で、悪臭もなく、ウジ等の小動物の大量発生も観察されなかった。時間の経過とともにゴミが消失していく様子が観察できた。

活動後の学生の感想から、驚きや不思議を感じ、生活のなかでの行動と関連づけられたことがわかった。実用面での発見や土がもつ浄化能力に関する気づきが見られたことで、ねらいの一部はある程度達成できたといえる。具体的疑問もでたが、教材のわかりやすさのためと考えられる。

まとめ；

ここで示した教材は、「食と環境」をリアルに体験でき、意識を高める1つの手段として効果的だと考えられる。保育者養成において、本教材の有効な活用を考えるとともに、保育活動への応用も考えたい。

参考文献

- 1) 平石 明、植木鉢と園芸土を利用した生物学的簡易生ゴミ処理、生物工学会誌、77：493-500、1999
- 2) 平石 明、植木鉢を利用した家庭生ゴミのコンポスト化処理に及ぼす天候およびその他の環境要因の影響、生物工学会誌、78：301-310、2000